

ジャズの巨人たち④ デイヴ・ブルーベック《タイム・アウト》

## 名作曲家ポール・デスモンドは アドリブでも最高のメロディー・メーカー

ジャズ・ミュージシャンが作曲したオリジナル（創作曲）で、『テイク・ファイヴ』くらい人気があって、ジャズに格別の関心がない一般の人にもよく知られ親しまれている楽曲はないと言っても、あながちの外れではないと思う。長年ジャズを愛好しているファンからは、ほかにもセロニアス・モンク（p）の『ラウンド・ミッドナイト』やハービー・ハンコック（kb）の『ウォーターメロン・マン』といった有名曲がたくさんあるではないか、と嫌みの一つも言われそうだが、『テイク・ファイヴ』の方がより一般的だというほどの意味であって、余りムキになられても困る。この曲が一般の家庭にまで浸透するようになった大きな理由は、テレビのCFを通して頻繁にお茶の間に流れたからだだろう。ほかにもジャズ・メッセンジャーズの『モーニン』やバド・パウエルの『クレオパトラの夢』など、CFに使われたジャズ曲が幾つかあるなかで、『テイク・ファイヴ』が大衆により親しまれたのは何故か。それはやはり、原曲のもつ魅力に負うところが大きかったからだと言うほかはないだろう。

『テイク・ファイヴ』は、米西海岸出身のアルト・サクソ奏者ポール・デスモンドが作曲し、当時彼が所属していた「デイヴ・ブルーベック・クワルテット」

の演奏でヒットした。本作《タイム・アウト》に収録されているのがそのオリジナル演奏であり、1959年夏に吹き込まれた。曲は「テイク・ファイヴ」（5拍子でやろう）の表題通り4分の5拍子で演奏されているが、3拍子と2拍子に分割（1、2、3／1、2）したリズム・パターンをブルーベックのピアノのヴァンプが打ちだす出だしの奇妙な？スウィング感に、何かしらワクワクするような期待感があった。何の変哲もない導入部だが、5拍子というユニークなタイムの醸しだすリズムック・フィーリングが、聴く者の心をいとも自然に弾ませるのだ。

ジャズでは3拍子のワルツも含めて、2、4拍子以外のタイムを「変拍子」と総称する。モダン・ジャズ黄金時代の扉が開いた50年代半ば、マックス・ローチやソニー・ロリンズらの主だった演奏家たちが盛んにワルツ・タイムの作品をつくって演奏するようになったが、やがてさらに進んでワルツ以外の、過去手つかずのままだった未知の変拍子に積極的に挑戦するミュージシャンが次々と現れるようになった。ブルーベックはそのパイオニアの一人だった。フランスの大作曲家グリウス・ミヨーの門下生で、一時かのシェーンベルクからも教えを受けた彼は、こうした変拍子に対して何らの偏見もアレルギーももっていないかった。もっ

## 悠 雅彦（音楽評論家）

【テイク・ファイヴ】

掲載教科書

教育芸術社「中学生の音楽 2-3下」

28～29ページ

題材／ねらい

「音楽を作ろう／アドリブを楽しもう！」

参考曲

(SPCS-9163)



ともジャズの場合は、作曲過程、つまりは五線譜の中で変拍子が全体を構成する不可欠な要素の一つに過ぎないクラシック作品とは違って、変拍子そのものが演奏の基本的なリズムを形成する。ソロイストはこの不馴れなリズムによってアドリブ（即興演奏）を行なわなければならない。一口に変拍子といっても、即興演奏となると一筋縄でいくものではない。4分の5拍子といえども、4分の4同様にスウィングしなければならぬ。ジャズは“スウィングしなけりゃ意味がない”からだ。

ブルーベック四重奏団のこの演奏には、涼風が体の芯を通り抜けていくような気持ちのスウィング感がある。この推進力の中心を担ったのがドラマーのジョー・モレロ（ベースはジーン・ライト）だった。彼は56年に入団し、グループが解散する67年まで在籍した。盲目でありながら、マイルスをはじめ多くの同僚や仲間から「ブルーベック四重奏団をスウィングさせた最大の原動力」と絶賛された名ドラマーだった。この4分の5拍子のリズムによって流れるメロディーは実に耳に馴染みやすい。マイナーの曲だがはじめた暗さは微塵もなく、ユーモア味さえある。愛らしくも恰好よいこの曲は、ブリッジを真ん中にはさんだABAの24小節できていて、4分の5拍子のリズ

ムによってデスモンドの温かな音色とクールなたたずまいの溶け合ったアルトがこの調べを紡ぎだすと、コンサートでは割れるような拍手が湧き起こったものだった。

吹込2年後の61年、ブルーベック夫人がこの曲に歌詞をつけ、名ジャズ・シンガーの故カーメン・マクレーがクワルテットと共演したステージで歌った。この実況盤も「テイク・ファイヴ」のタイトルで発売されたが、この曲で「タイム・アウト」（拍子を外す）と「テイク・ファイヴ」（通常は「5分間休憩」の意）の双方を用いて、“Won't you stop and take a little time out with me, Just take five”（ほんの少し時間をとって、私を外へ連れてって）と歌った歌詞が面白かった。

何やらテイク・ファイヴ談義に終始してしまった。余談ながら、本作は『テイク・ファイヴ』だけが聴きものなのではない。ブルーベック作の『トルコ風ブルー・ロンド』などは『テイク・ファイヴ』以上の名曲で、さまざまなグループがとりあげている。この曲は9拍子と4ビートを巧みに結び合わせているが、他の収録曲にも1曲としてまともな4拍子作品はない。だが、この爽やかなスウィング感と洒落っ気——ブルーベック四重奏団全盛期の一条乱れぬ洗練された演奏の快感が全編を貫いていて心地よい。